

我国の周辺地域の葬制・墓制文化の概観

稲 田 道 彦

1 はじめに

人の葬り方に関しての仏教の用語として、四葬の語が伝えられている（菊村紀彦 1984, p. 183）。土葬・火葬・水葬・風葬の四葬である。これらの語に接した我々の祖先の日本人はどのぐらいこれら四葬の具体的な葬儀の実態を知っていたのであろうか。そしてこれらの葬文化に対してどういう意識を持っていたのであろうか。またどのぐらいこれらとの接触を持っていたのだろうか。

今日本で一般に見られる葬制は主に土葬・火葬であるが、一部の地方では過去に水葬・風葬の名残りと考えられている葬法の報告もある。現行の日本の庶民の葬法は柳田国男（1963）が言うように仏教伝来以前から日本人の行ってきた古来の葬法に、仏教の布教以後、その葬法が大きく変わって現在に至っているのであろうか。また仏教と共にユーラシア大陸東部の葬法が共に入り、どのぐらい影響を与えたのであろうか。日本古来の葬法を柳田は「おきつすたえ」の法つまり風葬（放置葬）であると述べている。人々は祖霊に対し死霊が生者に祟りや災禍をなすと考え、死後の肉体を人々は恐ろしいと考えていた。肉体は腐って蛆がわき醜く汚らわしい存在であった。のちに一般人に膾炙した仏教は肉親の死体に対して、愛しいとか懐しいという気持を強調し、大切に祀ることを主張し、広まっていった。同時に墓を造り祖先を祀ることで先祖が子孫の幸福や繁栄を見守るといふように考え方の変換が行われた。肉体の安置所である墓所も大切に考えられ、墓地周辺にお堂が建てられ、これが仏教寺院として発展していくものもあった。

葬制・墓制は死者の幸福のためのものであると共に、生者の幸福のためのものである。死者に対して恐ろしいという感情と愛しいという両極の感情を結ぶ

軸の間にある、民族の感情またはそういう感情を生みだしている宗教的な感覚によって葬儀や墓をどのように執行し、造るかという事は決められている。

さて日本各地の葬儀に関する儀礼・風習についても、民俗学で説明できていない事象が数多くある。例えば香川県の西讃や島嶼部で今も行われている一人の人間に対し埋める墓と詣る墓を二つ造る両墓制もその起源について多くの議論がなされているが、結論はでていない。

本論では、日本の葬制と墓制文化の変容過程を考える場合、周辺国の葬制・墓制を知っておくことが必要であると考えている。日本の葬文化の形成過程に周辺国のそれが寄与したというお互いの交渉の歴史的な証拠はあげにくい、現在又は近い過去の葬文化を空間的に並べてみれば、類似している、またはそうでないという点が指摘できると考える。これが過去の交渉を調べる手がかりになるかもしれないという問題意識で、非常に雑駁になることを恐れながら議論を進めたいと考えている。

葬法の分類に関しても、今まで多くなされてきた。この分野で広範囲を展望している大林太良（1977）の概説書に、アフリカにおいて研究したキュスターの分類を紹介している。壁龕葬（壁のくぼみに埋める葬法）、火葬、生きながら埋める、ミイラ化、川に葬る、骸骨化、樹上葬、台上葬、二重葬、部分葬、秘密葬、屈葬、^{おうかん}甕棺葬、食屍葬（族内食人俗）、小屋葬、石葬、死体放棄の17種類の葬法をあげてある。大林は本書で、葬法の分類に関して、社会が死者に対してとっている基本的態度を基準にして分類すれば十分意味がでてくる、としている（p. 32）。

本稿では四葬と2つ以上の葬儀を1人に対して行う複葬の5つに分けて述べようと考えている。日本の周辺国を考えると、仏教という宗教の影響が大きかっただけに仏教用語の四葬という葬法で分類することに意味があると考えている。

2 論述についての注意

本稿の目的を、日本の葬文化を理解するための前段階として、周辺国の葬制・墓制の文化をとりあげ、空間的に配列して、文化の伝播があったとすれば、そ

の大きな流れを知る事に重きを置いている。また日本の葬文化についてはどういう範囲でどういう葬文化が成立しているのかという点で地方によって、精度にばらつきがあるので、後日にゆずる。

宗教や習慣に関する文化を圏域という具体的な場所の広がりとしてとらえることはかなり困難なことである。個人的な考えも入りこむ余地があり、同じ地方でも遺族の決定に差異があり、故人の社会的地位・経済状態によっても葬儀に差が見られる。それをある意味で一つの儀礼に代表させてしまうことにこの論文の問題点がある。また人間は移動するものであり、文化は地域内でも等質では決していない。一つの文化の中にも異質の伝統に従う人がいるという事を銘記しておく必要がある。

儀礼のいろいろな局面でもって分類することが可能で、各種の分類ができ上るのであろうが、本稿ではどういう状態に最終的に落ちつくのか、どういう状態であることを安定していると考えなのかという点に従って考えている。

次に資料を得る年代にも本稿の限界性がある。葬制文化は時と共に変化するものであるために国や民族によって現在も変化している。全部の民族や国民を同一時点での文化の断面のように扱うことができない。また始めから時間的には不揃いであることを承知の上で、あえて過去の事例を取り上げている国もある。特に社会主義の国は革命後、宗教に対して厳しい制限を加えている。そうしてそれは葬儀の簡略化又は改変となっている。これらの国については、革命以前の葬制を取り上げた。その理由は日本の葬制を考える上では現在の文化よりは関係が深いであろうという判断である。第2次世界大戦前の日本の旅行者等の記述も採用したが、これらの記述には多くの誤りがあったと今では言われている事も付記しておく。

研究の範囲はユーラシア大陸の東部とその周辺の島嶼部を考え、日本は除外している。具体的には、シベリア東部から中国や朝鮮半島、インドシナ半島、マレーシア半島、インドネシア、フィリピン、台湾の島々も範囲にしている。

記述は、風葬、水葬、火葬、土葬、複葬の順にする。

3 風 葬

風葬は遺体を放置して風化させるもの(菊村紀彦, 1984 p. 183)とすると、これに属すると考えられる葬法は、原野にそのまま放り出すものから、遺体を鳥や犬に食べさせるもの、台を造りその上に寝せるものや木に掛けるものまである。ここでは風葬として、遺体の周囲や棺や墓上にどのような構築物が作られようと、埋めない葬制を風葬として扱う。

a) 放置葬・台上葬・樹上葬

1971年フィリピンのミンダナオ島で猟師に発見され、初めて文明人と接触をもった石器を用いる生活をし、今だに採集経済にある部族がある。タサディ族である。彼らは死体を森の中に運び、木の葉で覆い、後にその場所を訪れることをしない。彼らの考えではその場所に森の精霊はいるが、精霊は人々にとって邪悪とか恐怖の対象ではない(世界人類百科 p. 2468)。死者の霊魂や肉親の死体に特別な感情を持たず、死人を活動をやめた「もの」を扱うのと同じ方法で放置する。霊魂に対する恐れは多くの原始的な生活にある民族にみられ、できるだけこういう霊の祟りに合わないように葬式を行っている。タサディ族と似た葬法をとるのは、古アジア人のネグリド人種のスリランカ中央部に住むヴェダ族である。彼らも地面に置いた死体を木の葉や枝でわずかに覆うだけである(世界人類百科 p. 2564)。ビルマのアンダマン海のメルギー諸島のモーケン族も死者をめったに近よらない所にある墓地に低い台を作り、その上に死体を置き放しにし野ざらしにするという葬法をとる(世界の民族 11 p. 115)。モーケン族は海のジプシーと言われ、マレー半島から逃れてきた人々で、マレー系の彼らが先住民であるが、後から入ってきた民族の奴隷狩りに合い、それを逃れて人の目につきにくい海域を舟で移動しながら生活している民族である。死体をただ放置するという風葬の報告はきわめて少い。

死者を棺に入れたり、死者を死後の世界である他界へ送る儀式をした上で棺を放置する事例にケンヤー族がある。ボルネオ島に住む民族である。彼らは1本か数本の柱で支えた上が平らか、もしくは家の形をしている建造物の上に棺を置く。階級によって棺と建造物の色と文様は違っている(世界人類百科 p.

1560)。同じくボルネオ島カリマンタンのマロー族も装飾と彫刻のなされた木棺を死者の家である納骨所に納める(世界人類百科 p. 2501)。スウェーデン島のトラジャ族はタウタウという儀礼により精霊の宿った等身大の死者に容貌のよく似た木像をつくる。この像と共に舟型の棺に納まった故人は崖に削られた岩窟の安息所に運ばれる。彼らの考えではここから故人の霊はヤシの木をつたって魂の国プヤへ登ってゆく(世界人類百科 p. 1799)。以上のようにある決まった場所や死者の小屋と呼ばれる建造物に棺を置き放置するという形式が存在する。彼らは死者の霊魂をととも恐ろしい存在と考え、盛大な葬式のあと、死者の安息所に棺を運び、後では近づこうとしない葬法のようなものである。そして東南アジアに古くからいる人種で、現在は後から進入してきた民族に追われ、辺境に住む少数民族という点に共通性があるようだ。

一方、シベリアでもかなり規則的に死者を森や荒地に放棄し、せいぜい石や枝を上にかけるだけの葬制が存在する(大林 1977. p. 41)。少数民族チュクチ族・サモエド^{注1}族の葬制である。ウデヘイ族は運命論者で、運命で病気になり、死ぬと考えた。死にそうになると1人きりにされ、死後も安らかな眠りを妨げないようにということで埋葬されず、放置されたままである(世界の民族 14 p. 104)。日本にも以前に、死は伝染するというような考えをもった時代があると聞く。人は死からできるだけ遠ざかり、他人に死の兆候を認めたら、皆が水がひくようにいなくなってしまう。そして他の場所で生活する。彼らの宗教はシャーマンの託宣を中心とするシャーマニズムである。

同じくシベリアには丸太の台の上に棺を置く台上葬や、樹の幹や枝に死体を掛ける樹上葬がある。トゥルゴルコフ(1969)はエベンキ族の伝統的な遺体の葬り方は「風葬」と述べている。「樹幹の半分でエベンキ人は柩をくりぬき、あとの半分でふたを作った。中をくりぬいたこの丸太を、先を細くとがらせた2つの切株の上に横たえるのであった。冬が9ヶ月も続き、おまけにシャベルがない場合これ以上合理的な方法を何か考えるということはむずかしい。」(p. 199)と記している。今西錦司(1952)も彼の大興安嶺の探検報告にオロチョン^{注2}族の葬法を、荒げずりの板の上に作った棺に死体を納め、高さ1メートルばかりの木組みの脚の上にのせて、こうして放置したまま一切近よらないと記し

ている(p. 85)。こうしたシベリアの放置葬は冬は凍土ばかりで、土を掘ることができないので土葬ができないという環境に適応した葬法であるにしても、それは葬法を説明する一面である。シャーマンが葬式を主宰し、人々の信じる宗教アニミズムがこういう葬法を正当づけている。それは彼らの死後の世界がどこにあるか、どうしたら死後の良い方の世界に行けるかという事を説明しているからである。

表1 シベリア東方の少数民族の葬法

海岸コリヤーク族 (台上葬)	オスチャック族 (台上葬)	サモエード族(死体放棄葬・土葬)
カムチャダール (樹上葬)	サモエード族 (台上葬)	チュクチ族 (死体放棄葬)
ユカギル族 (台上葬)	ユラク・サモエード族(樹上葬)	オスチャック族 (土葬)
内陸ツングース族 (台上葬)	フィン族 (樹上葬)	アイヌ (土葬)
オルチャ族 (台上葬)	タタール族(台上葬, 樹上葬)	ギリヤーク族 (火葬)
オロチョン族 (台上葬)	アルタイ族 (まれに台上葬)	ユリヤーク族 (火葬)
オロッコ族 (台上葬)	カラガッサン族 (台上葬)	
ギリヤーク族(かつて台上葬)	ヤクート族 (かつて台上葬)	
ウデヘ族 (台上葬)	ブリヤート族 (台上葬)	
樺太アイヌ (台上葬)	モンゴル族 (樹上葬)	

大林太良 (1977) p. 147 により作成

シベリアでの樹上葬の存在を大林 (1977) の概説書には見ることができるが (表 1), その他で、具体的な方法を記したのものには出合わなかった。しかし朝鮮半島での樹上葬の例が報告されていた(図 1)。村山智順が朝鮮総督府の命をうけて行った調査の報告の一部であるが、こういう葬り方をされるのは、埋葬所を持たない貧しい人と伝染病による死者である。しかも肉体がなくなり、白骨化すると、木からおろして共同墓地に埋める。一種の複葬であり、土地の霊 (疫神) への気づかいから、まず風葬にし、土の霊の祟りが解けるまで待ち、それから埋葬される。こうすると再び地上への再生が可能になると考えられている。樹上葬は人々に望ましい葬法とは決してとらえられていない。

朝鮮半島の人々は人種的にはシベリアの民族と近縁であり、文化的にも接触したり、同根の文化を持っていた。後に朝鮮半島は仏教が広まり、火葬が行われ、李朝では儒教が上流階級の宗教となり土葬が行われた。新しい文化の方が

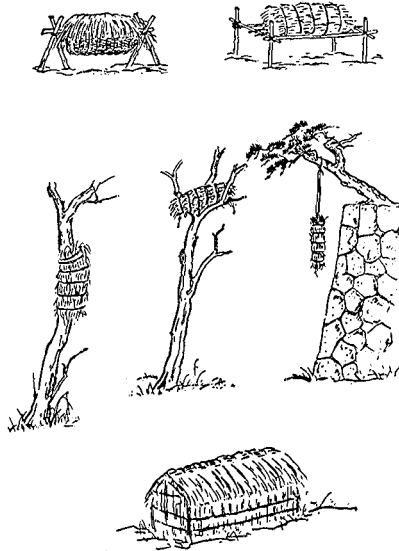


図1 朝鮮に行われた風葬の種類
朝鮮総督府 (1931) p. 368

どうしても目新しく、すばらしく、立派に見えるために、社会の上層部や支配者階級に受け入れられ、古くからある文化は周辺の農村部、社会的には貧しく下層階級の人々の文化として伝承されるのではないだろうか。古い時代に朝鮮半島に樹上葬が多く行われたという考証もなく推測したが、文化の伝播する際の一つの傾向としてなりたつかどうか、これからの研究の課題の一つとしたい。

なぜ台土葬・樹上葬を行うのかという点で他の理由をいう民族もいる。マレーシアのジャクン族である。シャーマンに限って遺体を台の上にする。一般人が死後地下の国へ行くので埋葬されるのに対して、シャーマンは天国へ行くために天国に少しでも近い台の上に置かれるというのである（世界人類百科 p. 1378）。台上・樹上葬は彼らの他界観と関わっている。葬儀と他界観がどのぐらいの関係があるのかも今後の課題である。

b) 鳥 葬

ラマ教を信じる人々の間で行われる鳥葬はその特異な葬法の故によく知られ

ている。ラマ教はチベットの民間宗教のボン教と仏教が結びついた宗教で、仏教の一派として扱われている。

鳥葬は集落の外れの大石の上で行われる。ラマ僧の読経の流れの中、俗人の御坊がハゲワシが食しやすいうように遺体を刀で小さく切断し、骨等は大石を落して砕いて、ハゲワシに食べさせる葬法で、残るのは髪だけであるという（河口慧海 1978 p. 145—146）。中国政府の影響下、現在ではラマ僧の臨席はなくなり、専門の解体師が鳥葬を執行している（加藤幹敏 1983, p. 27）。

付け加えるなら、チベットには鳥葬だけでなく他の葬法もある。高位の僧に行われる遺骸を塩の詰まった棺に入れておくことによりできるミイラを厨子に納める葬法。同じく高僧にのみ行われる火葬。また遺体を鳥葬と同じく小さく切断して川に流す水葬も行われた。土葬は人々に嫌われ、天然痘で死んだ人にもみ行われた（河口 p. 145）。鳥葬は鳥に食べられることにより、死体が天に登ると考えられた。また死体を焼いた煙が天を汚すので一般の人の火葬は行われず、聖者にのみ許された。もし煙が天を穢すと、農業にとって最も恐れられている時ならぬ霰や雪となって返ってくると考えられていた。

早く死体がなくなれば、早く昇天したとラマ教を信じる人は考えていた。チベット以外のラマ教圏のモンゴルや中国東北部（旧満州）では、路傍や原野に死体を置き、犬や狼に食べられ、早く姿が見えなくなるほど良いと考えた。都市の周辺には死体を置く場所が決まっており、そこに遺体が散乱し、棺から手足がはみ出し、動物のなすがまになっている凄惨な光景を描写した報告もある。中国東北部の綏芬河^{ソイフエンホー}では、草原に一枚の敷物をしき、その上に亡骸をおき草で覆う。北満・北支で見られ、主に下層民や辺縁の地で行われる。付近には多くの白骨体がみられる（後藤朝太郎, 1938, p. 304）。田原豊（1936）も蒙古の葬礼として、多くは棺を用いず、死体を氈に包んで野中に葬り、馬を放ってその上を踏ませる。さらに地方によっては、野にさらされ、犬狼の腹中に葬られ、その姿が早くなくなったのが多福とされる（p. 101—2）。同じく安才銘（1958）は、蒙古では狼が食べるよう谷底や山嶺に運ぶ。野葬とも天葬とも言う。漢民族との接触地では納棺して土葬とする。下の広い座棺を置き、回りに石を積み上げ塔の形にする。王侯・貴族は火葬にし、骨を粉にし麦粉に混ぜて

餅のように練り、霊塔に安置する (p. 117) と記している。

ゾロアスター教徒も鳥葬を行う。785年に移民して多くがボンベイの一区画に住むイラン系ゾロアスター教徒・パールシーも鳥葬を行う。死者を沈黙の塔に運びハゲワシについばませる。骨は塔の中心の井戸に落し、そこで石灰と燐の混合物にし、最終的に骨は分解し地下の排水渠をとおして3度濾過され、浄化状態になって一番下の井戸に達する(世界人類百科 p. 2197)。彼らがこうした葬法をとるのは、不浄な死体が空気・水・大地・火の4要素を汚さない方法で処理しようとしたために鳥葬になったという。

ラマ教を信じる人の中では、庶民は死ぬとすぐ祈禱僧によって靈魂を体外に移し、天上界安楽界へ送りだす祈禱がなされ、靈魂を失った死体はぬけがらで土塊と等しく何等の価値がないという(多田等観 1942 p. 24)。肉体が跡かたもなく消えてしまうと死人の後生がよいと喜ぶという。ラマ教とゾロアスター経の鳥葬をする理由の奇妙な類似はどこに原因があるのであろうか。両者が過去にどういう接触があったのであろうか。

以上が風葬である。肉体と魂とでは魂が格段に重く考えられ、肉体が消えてなくなってもそれほど重要に考えないかわりに、死霊・精霊に対しては激しく畏怖している。

4 水 葬

アジアでの水葬の例は私の調べた範囲ではきわめて少い。チベットで死体を切り刻んで川に流す葬法があることはすでに述べた。その他には舟に死体を乗せて流す例もある。大林(1977)によるとポリネシア・メラネシア・ミクロネシアの特定の島々の葬法として行われている(p. 192)。また棺を舟型に作る民族はそれ以上に多く、水葬との関連を過去に持っていたのかもしれない。その文化の起源は東南アジアの青銅器文化のドンソン文化に属していたとの研究もある(大林 1977, p. 194)。これは、祖先が海を渡って移住した民族、または移住の伝説をもつ民族が、自分達のもともとの故郷つまり根の国へ向けて、死んだ魂を返すために舟で送り出すのであろう。水葬と直接には結びつかないが、何らかの形で海の彼方に魂の国を考えている伝承を持つ人々の分布図(図2)

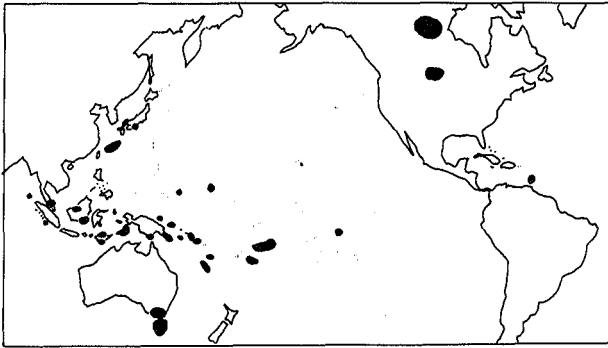


図2 海上他界の分布図

大林太良 (1977) p. 197

をあげる。

この図には、西方に観音浄土の存在を信じて僧が補陀洛渡海を行った熊野地方も含まれている。

5 火 葬

日本ではかつて都市部と浄土真宗を信じる人の多い地帯でみられた火葬が近年急増している。法律で奨励され、各地に火葬場が設立されているからかもしれない。しかし、火葬又は土葬のどちらかを選ぶという事は多くの人々(大衆)の考えに支えられた、死後観に照らして決められる性格をもつ。だから現在日本人に火葬の増加をゆるし、火葬が望ましいと考える人々が増えていることでもある。仏教も火葬も認め、火葬骨を塔に祀るという儀礼を古くから行っている。

火葬にすると、きれいだという言葉を方々で聞く。土葬は思わぬトラブルに出会う事があるようである。昔、犬が掘り返したとか、次の人を葬る時、穴を掘ったら、祖先の骨がでてきて、それが良い状態ではなかったという類の話である。こういう人の死体の変化に接する機会が火葬は土葬に比べ急減する。火葬にすることで、死体をきわめて短時間に遺骨の状態にしてくれる。しかもその過程を専門家がやってくれるので、死体の変化する状態につき合わなくてもすむ。死後の死体が腐りかけている状態を、日本人は好ましくない、汚い、恐

ろしいと思うようである。ここから日本人の死体が恐ろしくて、祟りをなす祖霊の存在を考えたのかもしれない。時に死体のこういう状態に接することのあった土葬から火葬に変容していったのは、人々の素朴な死体に対する考えが根底にあったようにも思える。こういう文化の変化は、人間の動物（生物）としての一面をできるだけ覆い隠そうとする文明の発達の方に沿うものなのかもしれない。

火葬は焼骨をそのままにしておくことはほとんどない。土葬か水葬にしてしまうという意味では2種の葬式を行う複葬であるが、時間的に連続して行われ、火葬の方に葬儀の中心があるので、単葬の火葬として取りあげる。

北アジアでは仏教と共に伝えられ、行われてきた火葬も、東南アジアでは仏教・ヒンズー教の教派宗教だけでなく、精霊信仰を行う少数民族にも見られる。ニューギニアのダニ族（世界人類百科 p. 630）、ジャレ族（同 p. 1381）インド・ビルマ・バングラディッシュの三国の国境付近に住むチン族のうち南部の部族、インドアッサム地方のカシ族（同 p. 1580）等である。これらの少数民族がどうい理由、又はどういう他界観を持っているから火葬を行うのかという点は明確にならなかった。

古くから火葬を行った民族はインドのヒンズー教で、火葬のなされた骨は聖なる川のガンジスなどに投げ込まれる。遺骨はあっけなく遺族の手もとを離れてしまう。早い時期ヒンズー教はインドシナ半島にまで広がるが、後からの仏教とイスラム教に追いやられる。インドネシアのバリ島の人々とベトナムの山岳民族チャン族にヒンズー教を信じる人々がいる。またこの地域の仏教儀礼にもヒンズー教の遺風が指摘できる。

インドシナ半島の上座部（小乗）仏教がタイ・ビルマ・ラオスの主要な民族に信仰されている。小乗仏教では北方へ伝えられた大乘仏教に比べて火葬された遺骨への祭祀はいたって簡略である。タイで、妻の火葬骨を入れた壺を寺で僧侶に読経してもらったあと、何の標識もない地面の一角に埋めた。僧がいうのに、「墳墓をつくるのは正しくない。なぜなら亡妻のスピリッツは墳墓にいつまでも留まって、何処かへ行って生まれ変わる機会が得られないから。」^{注3}

ラオスでも人々は火葬にする時悲しまず、この世の苦しみから解き放たれ、

たぶんもっと良い世界へ転じてゆけるかもしれないと考えているようだ。

シベリア北部でもギリヤーク族とコリヤーク族の火葬が伝えられている（大林 1977, p. 147）。現在中国では、1950年に殯祭改革令が出され、火葬化と簡単な葬式を行う運動が行われている。日本からボイラー等の技術導入をはかっている。従来土葬では墓地に多くの耕地をとられ、将来徐々に墓地が中国国土を侵食していくという危惧が説えられ、それにも対抗する意味がある。

6 土葬

遺体を土に埋める土葬が一番一般的ではないかと思われる。火葬と同じく広い範囲で行われる葬制である。日本でも長い間土葬が広く為されてきたが、その数は減少している。しかし地方によっては土葬の多い地方もある。1978年度末で土葬が40%をこえる県は茨城・山梨の各県、30%以上40%未満は福島・栃木・滋賀・高知の4県である。日本の事例は他で考えることにして、朝鮮半島と中国北部の事例を調べてみる。

a) 朝鮮半島の葬制

朝鮮半島でも南部の韓国の報例が多い。高麗・新羅王朝では仏教が広まり火葬も行われたが、李朝450年の間に儒式による土葬に固まってしまった。李朝に火葬を行ったのは僧侶、仏教徒、妓生、相続者のないもの、ライ患者とある（金思燁 1974, p. 350）。儒式では特に祖先崇拜の気持が強く、非常に複雑な葬式の執行方法が決められている。大まかな葬儀の流れは、まず1)初終という臨終にまつわる儀礼でこの中では主に卓復ツボクという屋根の上で北に向けて魂を呼び返す儀礼、死を確認しての衰哭、擗踊ヒョクヨンという胸や足をふるわせて故人をしのんで大声で泣きさけぶという事がなされる。入棺までの2)襲歛ヌツでは、襲ヌツという死体を清め、新しい着物に替えさせる事、小歛・大歛と2度に分けて死体をひもで七星板という北斗七星に描いた板にしばりつけ、このまま棺に入れる。次の出棺から埋葬までを3)治葬という。葬列は日本のものに似ているが、列は故人の官位姓名を書いた銘旌・臨時の位牌の魂帛・霊影（写真）、霊輿（棺）、棺をぬぐう麻布の巧布、雲垂鬘ウンテマという雲の文様のうちわ状の板、家族、弔客の順になる（李光奎 1971, p. 70）。

埋葬地には明堂^{ミヨンド}と呼ばれる風水思想上の吉相地が風水師（地理師ともいう）によって選ばれる。風をため、地の精気を吸い上げる場所が風水上の吉地で、青竜と白虎の2つの山脈に挟まれて、前に広い平地のある盆状の土地が吉地とされる。こういう場所に祖先の墓があると、子孫が繁栄すると考えられ、こういう吉地は今でもベラボウな値段になる。

今では3日か5日が出棺がなされるが、昔は家に棺を置いておくほど孝が深いとされ、相当な期間家敷に止め置かれた。墓地は土を盛り上げた土まんじゅう型である。埋葬後、約2年間の喪があけるまでに何回も故人を祀る儀式を行う。凶祭という。

儒教では親を火で焼くなるとんでもないという事で土葬になったときく。葬儀は故人と親しい長老が取りしきるのだが、日本の葬式で仏僧の役目を果すのが巫覡^{ムゲン}というシャーマンであり風水師も墓地をとうことで葬儀に参加する。場合によっては半仏半シャーマンの信仰団体の香徒、半僧半俗の居士などが葬儀に関わる。巫覡は仏教渡来以前から朝鮮半島にあったシャーマニズムの巫子^{ムコ}で、男性も女性もいる。神がかりになり様々の託宣をつけたり、病気を直したりする。朝鮮の神話上の人物や中国の道教の神、中国の英雄、仏教の仏を祀っている。

最近では国民の半数以上がキリスト教を信仰しているが、墓地は土まんじゅうを造り、上に十字架を立てている。また風水を今でもうるさく言うことには変わらない。

b) 中国北部

中国は広い国で、国内でもその葬法には地方差があるようである。過去の歴史の中でも異民族の進入により、漢民族の南への移動が繰り返されたことにより北と南では少し差異があるようである。

最後の王朝が満州族のたてた清ということもあって、中国古来の葬法と満州族の葬法とが混ざりあったものと思われる。民族的に北方系の民族である朝鮮民族と類似している面もある。

青木正児・内田道夫（1964）や羅信耀（1943）は戦争前の中国庶民の葬法を示している。そこには宗教的には儒教・道教・仏教・ラマ教が複合した独特な

葬文化を形成している。葬式に対して納棺・葬儀の日時等の細々とした指図をするのが陰陽生（卜占者）である。彼らは一般に易者と地卜者を兼ねるのが普通である。故人のために読経を行うのが道僧・仏僧・ラマ僧で、3宗派の僧が同席したり、または交代して魂を上仏させるための儀式を行った。陰陽生に選ばれた日時に葬儀が行われるのだが、棺を少しでも長く家においておく事が親に対しての孝行とされた。また風水に適した墓地がすぐには整わないこともあって死後かなり日が経過して出棺が出されることもあった。すでに一族の墓地が決まっている時には、墓地域内でも風水をみ、方角が細かく指定され、埋める時刻も決められた。大体10日位して出棺となった。墓は円墳で土まんじゅうの形に土を盛り上げた（図3）。

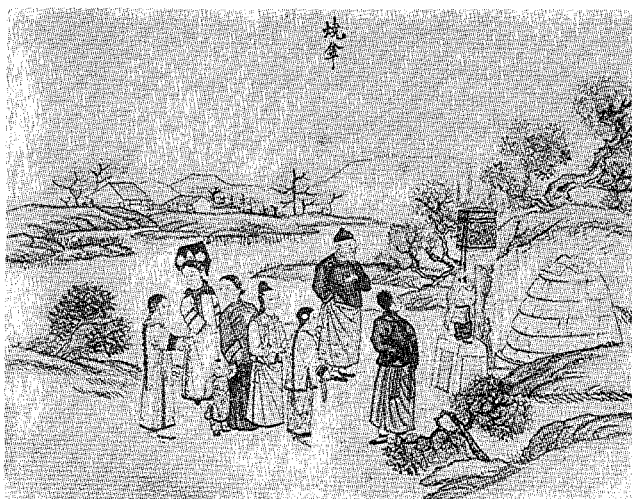


図3 中国北部での円墳と傘を焼く儀式
青木正児・内田道夫編（1964）（図2-21）

陰陽生のいう中国での靈魂は死ぬと人間としてのあらゆる感情を失い、社会的内親的絆は全く断たれてしまう。靈魂は3種の映^{イアン}があり、1つは死後悪魔と共に閻魔大王のもとにゆき、2番目は死体にくっつき墓場にゆく、3番目は家に残る。ある一定の日に、この2番目と3番目は合一してどこかへ立ち去るといふ。映は恐い力を持ち、死後のその出発を邪魔するものがあればそれは打

たれて病気になってしまおうと考えている。

死後の各種の行事にあたって、中国人は故人が霊界で使うための紙製の金・倉と衛士、道ずれの少年、トランク、船などを燃やして、霊界へ送ってやる。



図4 葬式の時に焼かれる紙幣 (表と裏)

図4は横浜の華僑が現在燃やしている紙幣で、香港製である。これを大量に燃やす。

c) その他の土葬

インドシナ半島でチベット・ビルマ語系の少数民族も土葬を行う。北東インドのダフラ族(世界人類百科, p. 609), インド・バングラデッシュ・ビルマの国境付近のチン族のうち北部に住むもの(同 p. 512), そして死者の最後の場所には何らかの記念碑を建てる。同じくビルマ北東部とインド, 中国国境のカチン族は浄めた死者を山頂に運び, 石塚で覆いその上に竹わくを置き石塚をかく

す。墓を造ったら盛大な葬礼の供儀による葬式が行われる（同 p. 1464）。

マレーシアのシャン族（同 p. 1378）、インドネシアのバタク族（同 p. 261）、フィリピンのイゴロット族なども土葬が行われる（深作光貞，1975 p. 99）。

以上のように土葬の性格はどこにでもできる葬法で、死体を視野から消してしまうことができ、火葬のように燃料がかからない。また死体を傷つけることはないので死体を傷つけると再生がおこらないとする宗教ではとられる葬法である。

7 複 葬

1人の死に対して複数の葬儀を行う、そのどちらも大切と考えているのだが、特に2度目の葬儀を本葬と考えている。その儀式によって魂が他界の住人となり、この現世から離れていくと考える傾向があるようである。

特に東南アジアではその葬法をとる人々が多く、インドシナ半島、中国南部、フィリピン、台湾、日本では南西諸島、伊豆諸島にみることができる。

a) 中国南部の複葬

中国南部が複葬であり、墓が巨大な亀甲墓であるとの記事は見る事ができた（BRIAN, 1982, p. 304）。しかしその具体的な葬法についてはフォローできなかったので、台湾へ移民した中国系住民の複葬について述べる（金関丈夫 1937）。一次葬で土葬にした後、二次葬のため遺骨を掘り上げるには年令によりその期間に差がある。30歳までは5年位、30歳から50歳までは大凡6年、50歳以上の人は8年ないし12年の後である。改葬は土葬墓をあばき骨を全て拾い上げ、骨を淨めたあと、土壺の棺に一定の順序で納めていく。第1次葬をいう凶葬の時と同じく、風水師を頼んで場所と吉日を選んで埋葬する。この2次葬の時の墓が亀甲墓で女性の陰部の形になぞられて考えられており、女性から生まれた人間が再び死して骨になって、もとの胎内にかえるという考えに従っている。この亀甲墓は中国文化の影響をうけた沖縄地方にも見ることができる。

日本の南西諸島では一次葬が土葬でなく風葬であることが違っている。洞窟や一部の亀甲墓の内部に肉を腐らせ骨化するための空間のある墓で2次葬を待つのである。

朝鮮半島でも南西部の地方に草墳があり、1 冢の 1 番下の形に草で覆った墓を造り、後で洗骨し改葬するのである。

ベトナムの複葬は、死んでもすぐに靈魂は死の国に行かずこの世に留まる。徐々にこの世から離れて、骨化するときこの世と離れるというように考えている。2 次葬が本当の葬式にあたるわけである。その他に中世のフィリピンでも複葬の事例が知られている。他にインドシナのヤオ族、ミャオ族、チャム人、モイ族、ロロ族が複葬を行うとの報告がある（大林 p. 181）。

複葬として一まとめに扱って良いものか迷うけれども、その具体的な葬法・墓制については今後の課題としたい。

8 おわりに

非常に粗雑なとり上げ方で、わが国周辺の葬制・墓制をみた。一応のまとめの図が図 5 である。よくわからなくて空白のままの場所もあるが概略的な図にしてみた。

日本をとりまく葬文化は多種多様でそれぞれの民族が独特である。日本との類似点も指摘できる部分もある。

本稿を書きながら、感じた事を書いて今後の課題としたい。

- a) 葬文化は、ある民族が他の文化の民族に接することで多種の文化をつけ加え、儀礼が長く複雑になるのではないか。それぞれが葬文化の要素を色々の形で含んでいて、それが独特の葬文化をつくっている。この範域では、その要素はあまり多数ではなくて、かなり少数に集約できるのではないかという気がする。やはり数々の儀礼を支えている他界観との関連は重大である。
- b) 同一地域に歴史的に異なる時期に形成されたか導入された葬文化が存在する場合、先に入ってきた文化は社会の下層の人々の葬法とみなされるのではないかと思われるがどうであろう。同一地域の複数の葬制の具体例に多くあたらねばならぬと考えられる。

最後に、東南アジア島嶼部からオーストラリアにかけて棚瀬襄爾の膨大な報告があるが未消化のためここに掲げることができなかった。

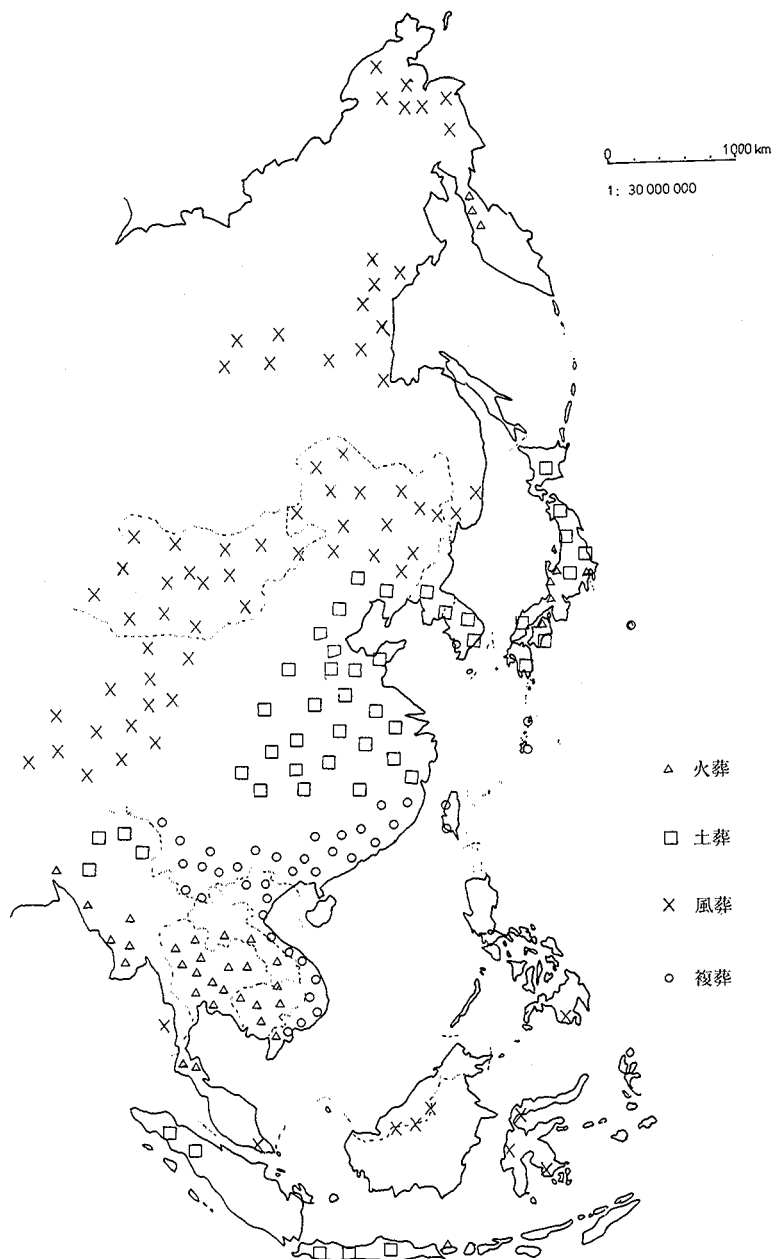


図5 東アジアの葬制・墓制

日本の葬制・墓制文化を浮き彫りにするためにもこの種の勉強を続けてゆきたいと考えている。

注1 かつてのシベリア北方民族の総称で、今はネンツィ族などそれぞれの集団の名称で呼ばれる。

注2 オロチョン族は現在エベンキ族と呼ばれる。

注3 竹村卓二(1975)が引用しているKINGSHILL(1965)のモノグラフ。

参 考 文 献

- 安才銘著, 大塚恒雄訳(1958)中国少数民族風俗史 学芸書房
- BRIAN, H (1982) *The Cambridge Encyclopedia of China*, Cambridge Univ. Press
- Family of Man の改編翻案(1978)世界人類百科 日本メールオーダー
- 深作光貞(1975)海上の道他界への道——与那国からマダガスカルまで——世界思想社
- 後藤朝太郎(1938)面白い国支那 高陽書院
- 今西錦司(1952)大興安嶺探検 復刻(1975)講談社
- 金関丈夫(1937)台湾本島人の洗骨の風俗 民族学研究 Vol. 3 No. 4
- 加藤幹敏(1983)鳥葬の里 リオン社
- 河口慈海(1978)チベット旅行記 3巻 講談社学術文庫
- 菊村紀彦(1984)読む仏教百科 河出文庫
- 金思燁(1974)朝鮮の風土と文化 六興出版
- 村山智順(1931)朝鮮の風水 朝鮮総督府 図書刊行会復刻
- 大林太良(1977)葬制の起源 角川選書
- ブリチャード・エバンス(1979)世界の民族 11, 平凡社
- 羅信耀, 式場隆三訳(1943)続北京の市民 文芸春秋社
- 李杜鉉, 張壽根, 李光奎著, 崔吉城(訳)(1977)韓国民俗学概説 学生社
- 多田等観(1942)チベット 岩波新書
- 田原豊(1936)満蒙の民情・風習・習慣 日本公論社
- 竹村卓二(1975)東南アジア地域の墓制, 森浩一編, 日本古代文化の探求 墓地, 社会思想社 p. 257—280
- 棚瀬襄爾(1966)他界観念の原始形態 京都大学東南アジア研究センター
- トゥゴルコフ, B. A., 斎藤農二訳(1981)トナカイに乗った狩人たち 北方ツングース民族誌 刀水書房
- 内田道夫編(1964)北京風俗図譜 第1 平凡社東洋文庫 23
- 柳田国男(1963)葬制の沿革について 筑摩書房 全集第15巻